

機関番号：13902

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730333

研究課題名（和文） ひきこもり関連ライフトラブルの包括的プロフィールと地域支援拠点の研究

研究課題名（英文） Research in The Comprehensive Profiles of Life Trouble related to Hikikomori (Social Withdrawal) and Local Support Centers

研究代表者 川北 稔 (KAWAKITA MINORU)

愛知教育大学大学院 教育実践研究科 准教授

研究者番号：30397492

研究成果の概要（和文）：

「ひきこもり」問題は、従来の枠組みに収まりにくい「生きづらさ」について、新たな理解や支援を模索する契機となっている。「ひきこもり」に関連する「発達障害」や「貧困」の問題に関連して、従来の「ひきこもり」理解を、本人の障害特性と環境との関係、生活保障制度などの活用に着目することで拡大することを試みた。「生きづらさ」について障害特性と生活履歴の二つの軸によって理解する枠組みを整理するとともに、特に家族の視点からの本人の生活履歴と特性との関連についての調査を実施した。

研究成果の概要（英文）：

Hikikomori(social withdrawal) is a indeterminate social problem which is not included perfectly in standard support system. In this research, understanding of hikikomori is renewed by properties associated with developmental disability and comparison with problem of poverty in youth. As a result, framework of research understanding difficulty of living was constructed, and association of biography and properties was made clear.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：

キーワード：ひきこもり、社会学、地域支援拠点、NPO、精神保健福祉

1. 研究開始当初の背景

(1) 「ひきこもり」と若者研究の方法論

「ひきこもり」は若者をめぐる問題の一カテゴリーであるだけでなく、従来の問題の枠組みに収まりにくい「生きづらさ」に対して、

新しい理解や支援の枠組みを考える契機となった。具体的には、息の長い時間軸の中での若者理解や、教育、医療、就労支援のような社会的領域に完全には還元されないような、多領域的な支援の連携などである。「ひ

きこもり」が単一の領域で解決困難であることは、従来機能していた家庭、学校、職場間の移行をめぐる社会的絆の弱体化を浮き彫りにする。また多領域的な支援の模索は、「ひきこもり」に限らず、「無縁社会」現象など各所にみられる社会的空隙を埋める方途について、示唆するところが大きい。

報告者の研究を含む社会学的な調査研究は、「ひきこもり」が荻野達史ほか編著『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』（ミネルヴァ書房、2008年）としてまとめられており、メディア言論、支援活動、本人や家族の個人誌（biography）をめぐる分析を収録している。

(2) 貧困と発達障害という課題

他方で、貧困や発達障害という新たな課題は、ひきこもり理解や支援にも再構築を迫った。ひきこもり支援は、居場所や家族支援、就労支援などの形で、典型的な支援のノウハウが整備されてきたといえる。しかし、たとえば居場所での集団的な支援の枠組みが適格的ではない対象者や、すでに両親と死別・生別している、家族からの支援が受けられない対象者など、従来の形態の外部にあるような潜在的ニーズへ目を向けるべき時期が到来している。

具体的な対人支援のレベルでは、障害をめぐる生物学的な特性理解の導入や、さまざまな社会保障制度の活用などが求められつつある。それと同時に、従来の研究が、引きこもる若者の「心性」に着目して、その体験を理解しようとしてきたのに対して、本人の特性と環境との相互作用、制度的な背景へも着目した研究が求められることになったといえる。

2. 研究の目的

(1) 「ひきこもり」概念と包括的若者支援の変容

「ひきこもり」は、個別の診断名や特定の「原因」に還元されないような広汎な対象者を引きつけ、包括的な見守りを継続するような支援の枠組みを形成する可能性をもつ概念である。ゆえに、貧困や発達障害という新たな課題への直面によって、この概念をめぐる諸活動がどのように再編されるのか、「ひきこもり」概念の境界や内実に応じた変化がもたらされるのか、見極めることが研究の最終的な目標となる。

(2) 発達障害をめぐる課題

本研究では、従来の研究が典型的な「ひきこもり」エピソードに偏ったのに対し、「ひきこもり」に関連するより広範囲な生活履歴や、関連する社会環境、制度に注目することを目的とした。

発達障害に関しては、ひきこもりの生物学的な背景としての記述は、すでに社会問題化の初期において、厚生労働省によるガイドライン等でも明記されている。しかし専門的・社会的な障害理解は、数年あるいは一年単位で変容しつつある。ひきこもり支援の現場においても、発達障害と具体的な若者諸個人の困難との関連が、当研究の期間中にも急速に意識されるようになった。こうした中において、単に既存の医学的知識を援用するだけではなく、個人の「生きづらさ」を理解する枠組みに対して、障害概念がどんな影響をもたらすのかという社会学的視点を形成し、それによる社会や個人の認知の変容を観察することが課題となる。

(3) 貧困をめぐる課題

また、貧困問題の広がりやなか、ひきこもり経験者や家族の高齢化も適される。貧困や

社会的孤立は、家族を主体としたひきこもり支援の限界を露呈させる現象ともいえる。支援現場においては、障害者手帳・障害年金や生活保護の受給に関するエピソードも珍しくなくなりつつある。これらの社会保障制度の利用が、ひきこもり支援の手法や目標にどんな影響を及ぼすのかが調査の課題となる。また、貧困に関する支援団体（労働運動、生活保護同行支援活動など）と若年者支援との相互浸透についても参加や聞き取りのテーマとした。

3. 研究の方法

本研究の目的のひとつは、顕在的な「ひきこもり」支援だけでなく、その周辺の潜在的なニーズの関連性をさぐることである。それゆえ、予備的研究として、従来の「ひきこもり」支援の枠に収まらない支援活動にフィールドワークを広げ、参加や聞き取りを進めた。

貧困問題の関連では、当初はネットカフェ難民等に関する支援の調査を構想していたが、調査の過程において製造業派遣切り問題が生じ、東海地方においては報道も含めて大きな影響をもたらした。そこで、有力な「地域支援拠点」として名古屋市のN区役所周辺における支援活動が浮上した。この活動を中心とする団体間の連携や、人的ネットワークをたどる形で調査を行い、若年者支援活動との相互浸透を探った。

また発達障害や学習障害に関する普及啓発活動や支援活動を行う団体に調査の対象を広げた。学齢期の子どもへの支援に比して若年者をめぐる発達障害の支援は遅れていたが、調査期間中にも一般書の刊行やメディア報道が相次いだ。こうした趨勢の中、発達障害の支援団体や専門家がもたらす知識が、ひきこもり支援団体においても援用されよ

うとしている。その浸透度や影響については、支援団体における学習イベントへの参加など、アクション・リサーチ的な手法も交えて調査した。

以上のような背景的調査を踏まえて、より焦点を絞った調査として、①障害特性や生活保障制度の活用を踏まえた個人誌

(biography)の聞き取りを、ひきこもり支援団体内外を対象に行った。②ひきこもり支援団体においては、障害特性に関する認知を項目に盛り込んだ質問紙調査を行った。以上の知見の位置づけを可能にするような枠組みを形成するため、障害特性と生活履歴の関連を「生きづらさ」の概念で解釈する論文を執筆した。

4. 研究成果

(1) 生きづらさの位置づけに関する成果

まず、調査の実施や調査結果の解釈を可能にするため、研究の枠組みを準備した。論文「若者の生きづらさと障害構造論」では、ひきこもりより広汎な用語としての「生きづらさ」を、障害学の成果を手掛かりとして位置づけることを試みた。若者の生きづらさについて、「障害特性の理解」と、「生活履歴」（ひきこもり経験など、社会参加からの撤退を含む）の二つの軸から理解することができると思われる。これらは障害学の器質的な損傷（impairment）と社会的な障壁（disability）の区別に対応する。他方で、若者の生きづらさ、特にメンタルヘルスの問題がどれだけ理解可能になるのかについては、従来の枠組みの限界も指摘できる。

(2) 障害特性に関する成果

論文「ひきこもり経験者への支援と発達障

害の特性理解 (1)」では、ひきこもり支援団体 (家族会) 参加者を対象に、障害特性の理解や、家族・支援者による環境整備についての質問紙調査を行った。高機能自閉症に関する尺度を用いて、家族による本人の「生きづらさ」の理解と、障害特性との関連を探った。その結果、特に友人関係の持ちにくさなど、本人の社会性に関する特性を家族が強く意識していること、また特に小学校からの不登校において尺度の得点が高くなるなど、生活歴と障害特性の関連を示唆するような結果が得られた。

また 2005 年に実施した同じ団体における調査と比較することで、両親による「ひきこもり」の改善の実感に関連する要因として、家族会参加頻度の高さ、本人が現在抱える精神的問題の有無が改めて確認できた。

論文「曖昧な『生きづらさ』と家族」は、ひきこもり経験者の子を持つ 4 人の家族 (母親 2 人、父親 2 人) へのインタビュー調査をもとに、子どもの生活履歴と障害特性の関連に関する語りを含めて、考察をおこなった。長期にわたるひきこもり経験においては、子育てや子どもの障害特性の影響を、何についてどこまで振り返るのか自体が複雑な問題となる。家族たちは、家族特有の生活歴 (親自身の就労や離婚など)、今後の支援の必要性とも関連させながら、子どもとの経験を振り返っている。また親自身の立場でも新たな個人誌 (biography) を形作っている。

(3) 貧困などに関する支援活動についての成果

貧困に関する支援団体の取材では、生活保護の申請を支援する団体において、メンタルヘルスに課題を抱える若者と直接・間接に接触し、経験の聞き取りを実施、データを収集

した。

経済的な困難と対人関係上の困難がオーバーラップするケースについて、生活保護の受給を促進するなどの経済的支援だけでなく、「炊き出し」的活動を野宿者だけでなく居宅者にも継続するなど、「居場所」的な支援手法が模索されている。他方、「ひきこもり」支援においては対人関係上の支援が先行し、年齢上のタイムリミットなどによって障害者福祉や生活保護の制度が検討されることが多い。こうした貧困問題に関わる支援活動と若年者支援の異同については、今後も考察を続けたい。

研究期間を終了するにあたり、特に「ひきこもり」概念との関連で確認しておきたいのは、対象者が抱える広汎な困難を理解し、支援するために、「居場所」的な支援の有効性が注目され、貧困問題の現場にも持ち込まれようとしていることである。他方、障害特性など個別の困難を視野に入れると、支援や研究の手法として、「居場所」による集合的体験の提供のみに着目することの限界も見え始めている。

近年の市民活動では、コミュニティ・ビジネスなど、支援・被支援の関係にこだわらず、必要に応じて生きづらさへの対応に有効性をもつような活動形式が注目されている。家族の高齢化によって、若者支援の隠れた母体としての親役割が期待できなくなると、短期的な「支援」を越えて、若者同士による新たな共同生活の形を模索する必要や可能性も浮上するだろう。また若年者による独立系ユニオンの活動などでは、「デモ」などの形による新たな交流の形式が模索されている。

こうした「集まりの形式」に対して、どのような概念や方法論を用意することができるかが、今後の課題のひとつといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

研究者番号：

〔雑誌論文〕(計5件)

①川北稔「ひきこもり経験者への支援と発達障害の特性理解(1)——家族会参加者への質問紙調査から」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』第1号、pp.47-53、2011年(査読有)。

②川北稔「曖昧な生きづらさと家族——ひきこもり問題を通じた親役割の再構築(シンポジウム報告)」『家族研究年報』第35巻、pp.13-27、2010年(査読無)。

③川北稔「『ひきこもり』と家族」『ヒューマンサービスリサーチ』第16号、pp.58-67、2009年(査読無)。

④兵藤友彦・川北稔「『便所くんプロジェクト』という市民活動——不登校経験者の高校生を中心とする『他者』『モノ』『街』との出会い」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第12号、pp.301-306、2009年(査読無)。

⑤川北稔「若者の『生きづらさ』と障害構造論——ひきこもり経験者への支援から考える」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第12号、pp.293-300、2009年(査読無)。

〔学会発表〕(計1件)

川北稔「家族支援から本人支援への接続——ひきこもり支援 NPO のフィールドワークから」対人援助学会第1回大会、2009年11月7日、立命館大学衣笠キャンパス。

〔図書〕(計1件)

荻野達史・川北稔・工藤宏司・高山龍太郎編著『「ひきこもり」への社会的アプローチ——メディア・当事者・支援活動』ミネルヴァ書房、2008年。(第3章「『ひきこもり』と統計——問題の定義と数値をめぐる論争」(pp.76-96)、第6章「『ひきこもり』と家族の経験——子どもの『受容』と『自立』のはざままで」(pp.159-181))

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川北 稔 (KAWAKITA MINORU)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：30397492

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()